

第7節 美園遺跡出土の手焙形土器について

花園大学 野 藤 和 也

1 はじめに

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて、所謂「手焙形土器」⁽¹⁾と呼ばれている土器が存在する。その分布は現時点に於て、北は群馬県から西は福岡県まで、18府県83遺跡を数える。⁽²⁾

この手焙形土器について、先学諸氏により、分布、形態、用途について研究され、性格の一端が明らかに成りつつある。⁽³⁾⁽⁴⁾

今回、美園遺跡から16点を数える出土があった。第31表の様に、弥生時代後期末から古墳時代前期前半にかけて、溝、土坑、井戸、或いは包含層（遺構面上を含む）からである。また個々の手焙形土器自体にも、成形技法、形態等に違いが認められる。

小稿では、今だ性格不明の手焙形土器について、成形技法と形態、伴出遺物、出土状態等から検討を加え、性格の一端を考えてみたい。

第31表 美園遺跡出土手焙形土器一覧表

図面番号	形態分類表	分類	出土地区	遺 構	時 期	備 考	図面番号	形態分類表	分類	出土地区	遺 構	時 期	備 考
B 993	37	B ₂	B	SE301	前期前半		D134			D (STA102+0)	包含層	後期末～ 前期前半	
C188			C	SK301	後 期 末					D	SD206	後 期 末	SD206は上層より 下層は中期
C310	30	B ₂	C	SD319	前期前半		D186	8	A ₂	D、2D (STA101+30)	包含層 サブトレレンチ	前期後半	405はサブトレ レンチより
D548			D (STA102+30)	包含層	後期末～ 前期前半	開口部に穿孔	D104	25	B ₂	D (STA102+0)	ベース面	後 期 末	文様有り
D135			D (STA102+10~20)	包含層	前期前半		D134			D (STA102+30~40)	包含層	前期前半	文様有り
			D (STA102+10~20)	包含層	前期前半		D133	26	B ₂	D	庄内Ⅱ	後 期 末	文様有り
D146	24	B ₂	D (STA102+30)	庄内Ⅱ	後 期 末	開口部に穿孔	20	20	A ₁	3 D	包含層	前期前半	形態分類図参照
D136	7	A ₂	D (STA101+80)	包含層 (サブトレレンチ)	前期前半		D267	2	A ₁	6 D	DSD323	後 期 末	

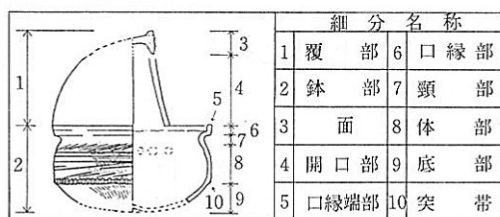
2 美園遺跡出土の手焙形土器について（第445・446図）

本遺跡出土の手焙形土器は先にも触れた様に16点を数えた。一部重複するが、分類の基礎的作業として、成形技法と形態について⁽⁵⁾記述する。なお本文中に於ける部分名称は第440図による。

形態

手焙形土器は、鉢部と覆部との接合状態から、A・B類に分類が成される。A類は口縁部が覆部との接合に際しても、残存しているものである。B類は口縁部が覆部との接合により、一体と成るものである。さらに、技法と形態から1～5類に細分される。

1類は覆部との接合部に補強粘土を貼付け、幅、長さを持つ突帯状に施す。



第440図 手焙形土器名称図

2類は口縁部を短く外反させて、覆部を接合する。この際余分な粘土を口縁部に貼付けて、小さく突帯状に施すものがある。

3類は受口状口縁を呈する。覆部は口縁端部から内面にかけて接合するものと、頸部内面上に接合するものとが見られる。

4類は覆部と鉢部との接合部に貼付突帯を施すものである。

5類は本来、外反する口縁を呈し、平底及び突帯が見られるものである。

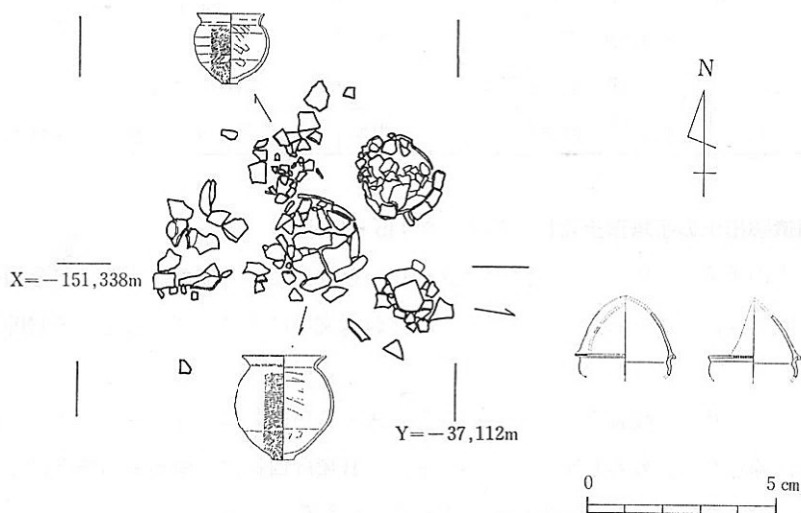
6類は体部の突帯は明瞭ではなく、底部も丸味を持つものである。

以上の特徴を持つ手焙形土器の成形技法について述べる。なお、ローマ数字は後述するが段階（Ⅰ…弥生時代後期後半。Ⅱ…弥生時代後期末～古墳時代初頭。Ⅲ…古墳時代前期前半）を表わす。

Ⅱ A₁に属する2はD S D323が堆積した段階で、甕（D268～D270）とともに出土している（第441図）。復原口径19.2cm、現存高13.0cmを測る。体部は短く丸味を持ち、覆部の高さのある手焙形土器である。覆部は幅約3cmの粘土紐を積み上げた痕跡が観察される。また、覆部と口縁部との接合部のみに丁寧な刻目が認められる。これは接合の強化と装飾性を加味したものと推察される。その他、内外面は撫で調整が施される。

Ⅲ A₂に属する7・8は包含層からの出土である。この2点は形態、胎土、調整、法量等が似かよっているが、体部下半の突帯の形状、或いは覆部との接合による口縁部形態等が違っている。

7は開口部が遺存しており、口縁部との接合時に余分な粘土を端部に貼付けている。体部下半



第441図 6 D トレンチ D S D323手焙形土器出土状態図

には突帯が貼付けられているが、刻目は無い。また、調整は鉢部外面が撫で調整であり、覆部外面では縦の刷毛目が見られる。特に内面の接合部には、粗い刷毛目が見られる。この7・8はサブトレンチから取り上げられたが、これはDSE301を掘削している。この遺構より出土している二重口縁装飾壺と同形態、同胎土の壺(D109)が、サブトレンチより手焙形土器とともに取り上げられている等、これらはDSE301に伴う遺物と推察される。この他、DSE301からは、甕、鉢が出土している。

ⅡA₄に属する20は生駒西麓の胎土を持つものであり、覆部との接合部に突帯を持つ。包含層からの出土である。

ⅡB₃に属する3点のうち、2点の開口部には、形成された面を持ち、覆部、鉢体部に文様が施されているが、細分では技法、形態、施文が相違している。特に面の形成、施文と調整等について比較し、特徴を見る。

まず面の形成では、25が粘土紐を開口部端部両側に貼付けて面を作る。また面には最初の開口部端部を用いて、一条突帯としている。26では25と同様に粘土紐を貼付けるが、さらに下部は指圧で引き延ばして面を作る。面には二条の貼付け突帯を施す。また開口部頂部に幅広い面を持つ。

文様は面、覆部、鉢体部に施文されている。面では25が突帯両側に二条ずつの波状文。26では二条突帯の中央部下部に竹管浮文を施す。浮文の構成は2個1対と1個を1組として、対称的に施す。その結果、面上部には5個の浮文が、ほぼ等間隔に並ぶと考える。

覆部では25が波状文、格子文、直線文、斜線文、列点文、棒状浮文の各種文様が施されるのに対して、26では綾杉文、直線文が施されるのみである。25と26の施文構成について詳細する。

25の構成は①沈線の区画線を引く。② 右上りから左下りの格子文と斜線文を施す。③ 棒状浮文を貼付ける。横方向の棒状浮文は、中央に太い沈線を引き、二条の浮文とする。④ 列点文を棒状浮文、開口部側面下部、口縁受け部下部に施す。⑤ 波状文を施す。

26の構成は25より鋭いヘラ状工具によって、① 右廻りの直線文の区画線を引く。② 綾杉文が右廻りに下から上に動かす。また反対側からは左廻りに動かし、中央部よりで重複させる。

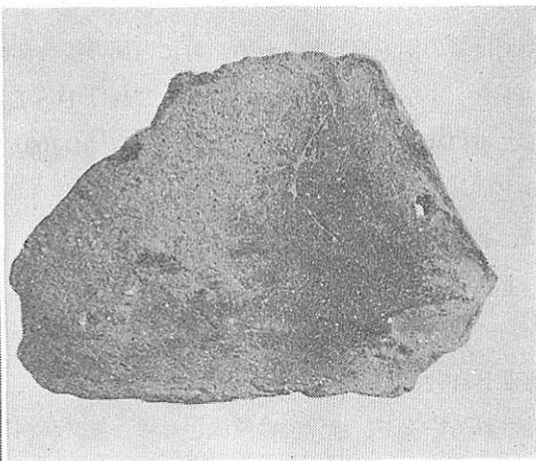
鉢部に於ては25が三条の直線文と頸部に斜線文。26では三条の直線文の両側に斜線文を施す。また体部下半には突帯が貼付けられているが、25は丸味を持ち、26では扁平な形態を呈している。さらに突帯には25が列点文、26には篋状工具による幅の有る規則的な刻目が施される。

次に調整では、25の覆部外面が粗い刷毛目、内面は篋撫で後に撫で調整が施される。鉢体部外面は右下りの粗い刷毛目、突帯部は接合を補強させる左下りの刷毛目、底部は左廻りの3条/cmの叩き目を施す。26は口縁部横撫で、体部斜方向の刷毛目。底部は粗い刷毛目で右下りに施す。

これらの胎土は、25が石英、長石粒が微量認められる精良な胎土である。淡褐色を呈する。これに対して、26は石英、長石粒が明瞭であり、灰白色を呈し、形態、施文構成、胎土から滋賀県南部地域の手焙形土器と考えられる。また3に於ては、地域を明確にはしがないが、施文や形態



第442図 D地区包含層手焙形土器出土状態図



第443図 穿孔された手焙形土器 (D548)

等から26よりさほど遠くない地域と考える。

出土状況に於て、25はD S D313 付近からの出土であるが、伴出遺物は明確ではない。26は遺構面上より (第442図)、鉢D140、手焙形土器ⅡB₃—24と伴出している。

ⅡB₃—24は美園遺跡出土の中で、覆部の成形技法が唯一理解される、手焙形土器である。覆部はドーム状に粘土紐が積み上げられている。粘土紐は6段、幅約3cmを測る。開口部は横撫により、端部上部を肥厚させている。内外面とも撫で調整を施す。また開口部に焼成前の径4mmの穿孔を施す。この他にも同様の穿孔が施された手焙形土器 (D548、第443図) が出土している。胎土は長石、石英粒が多く混入しており、内外面とも撫で調整を施す。

ⅢB₆に属する37は、復原口径16.3cm、現存高15.2cmを測り、丸味を呈する底部に、平坦な底を呈する。内面には指圧痕が顕著である。外面には3条/cmの左下りの叩き目が施され、ⅡB₃—25と同様に底部成形に用いられている。また、体部中央部には接合痕が認められる。体部と底部の境いには、稜線程度の突帯が施される。胎土は軟質の灰白色を呈する。この手焙形土器はB S E301より、二重口縁装飾壺 (B992) と伴出している。

ⅢB₅に属する30は、C S D319より、甕 (C301) と伴出している。生駒西麓の胎土を持つ手焙形土器である。復原口径22.2cm、現存高11.0cmを測り、小形の分類に属する。外面には篋磨き、内面は篋撫で調整が施される。体部下半には刻目突帯が貼付けられる。

また、分類はできなかったD134は、開口部の破片で、粗い刷毛目により端部上部を肥厚させ、面を形成する。この面には列点文が施され、生駒西麓に近い胎土を持つ。

C188は体部から底部にかけての破片で、在地的な胎土を持ち、三角状突帯を貼付ける。

以上A・B類に分類される美園遺跡の手焙形土器について、成形技法を中心として記述をおこなった。

次にこれらが帰属する時期は、伴出遺物及び出土状況から、ⅡA₁—2と伴出した甕 (D268)

が弥生時代後期末の特徴を持つ。Ⅲ A₂—7・8は装飾壺(D112)、甕(D114)、鉢(D111)から古墳時代前期前半に。Ⅱ B—24・25・26は鉢(D140)から24・26がⅡ A₁—2とほぼ同一時期と考える。25に於ては、伴出遺物が無く、時期の帰属が明確ではないが、24・26と同一層中であることから、ほぼ同一時期と考える。Ⅱ A₄—20は包含層中からの為、時期の帰属は明確ではないが、遺構出土遺物から、弥生時代後期末をさかのぼらないと考える。Ⅲ B₆—37は伴出した装飾壺(B992)から、古墳時代前期前半に。Ⅲ B₅—30は甕(C301)から古墳時代前期前半。また、C188は伴出遺物から美園遺跡出土の手焙形土器に於ては、古い時期に属する。

A・B類に分類が成された手焙形土器は、いかなる用途に使用されていたのかを考える為に、出土状態から推察してみよう。

出土状態

美園遺跡出土の手焙形土器は各地区から出土している。しかし、先に分類をおこなった段階ごとの分布を見るならば、地区ごとに集中する傾向にある。その変遷はC地区→D地区→B・D地区の流れが理解される。このことは美園遺跡の集落変遷(付図35)と同様の傾向を示す。さらに、B・D地区に於ては、D地区南半から北へ移行し、トレンチ北端のDSE301で出土する段階で、B地区に於て出土する。

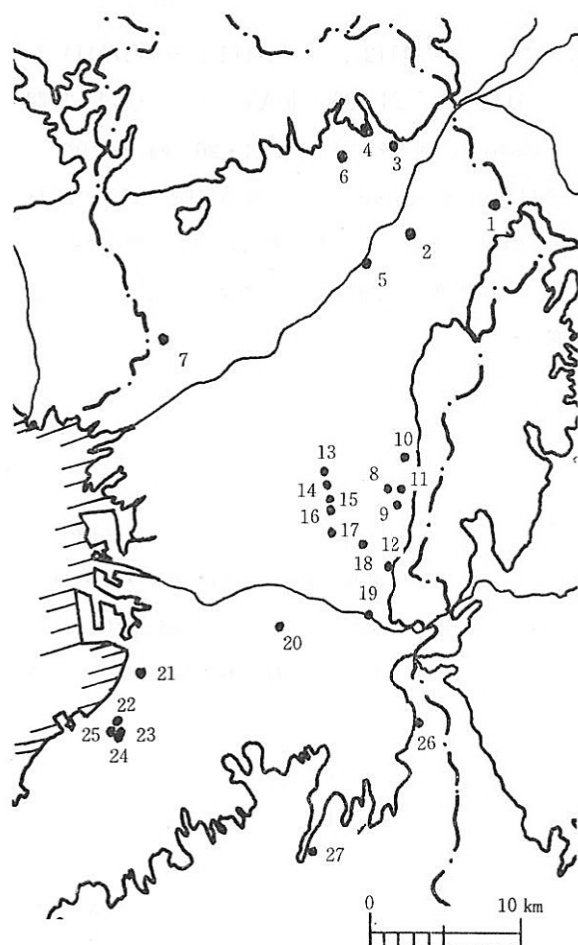
出土遺構は集落の端に位置する溝、土坑、井戸からである。手焙形土器はこれら集落の端に位置する遺構から出土するが、単独で出土することではなく、CSK301等に見られる様に、複数の土器とセットと成っている。また、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭ほど器種、点数が多く、古墳時代前期前半に移るほど減少していく傾向にある。さらにセット中の壺は常に装飾が施されたものばかりである。また、他の器種とのセット以外にも2個体の手焙形土器と他器種とを組み合わせで出土している。この様な例は蔵持黒田遺跡⁽⁷⁾に於て報告されている。その他、開口部に穿孔が施された例や、開口部に形成された面を持つもの、さらに内面に煤の付着等、手焙形土器にも多様な姿を持っている。特に弥生時代後期末にこの複雑化がみられるが、その多くは他地域産の胎土を持つものである。

美園遺跡に於ける手焙形土器を用いた祭祀行為は、閉鎖的な性格を持つものではなく、他地域からの刺激を受けながら、集落の端に於て水を対象とする祭祀がおこなわれていたと考える。しかしながら水を対象として、如何なる事を祈念したかは今後の課題とするものである。⁽⁸⁾

美園遺跡の手焙形土器は集落内での祭祀行為に用いられたが、周辺遺跡では如何なる状態を示すかを段階ごとの変遷から述べてみよう。

3 周辺地域の変遷

周辺遺跡の手焙形土器の形態は美園遺跡出土のものと同じ形態分類が可能である。また、時期に於ては東山遺跡から上限が弥生時代後期後半に、美園、成法寺遺跡から古墳時代前期前半が下限である。



- | | | |
|--------|---------|----------|
| 1 藤坂 | 10 上六万寺 | 19 船橋 |
| 2 鷹塚山 | 11 鬼塚 | 20 上田町 |
| 3 安満 | 12 思智 | 21 四ツ池 |
| 4 紅茸山 | 13 瓜生堂 | 22 池上 |
| 5 柱本 | 14 若江北 | 23 古池北 |
| 6 郡家川西 | 15 美園 | 24 豊中・古池 |
| 7 庄内 | 16 久宝寺南 | 25 七ノ坪 |
| 8 北島池 | 17 亀井 | 26 東山 |
| 9 馬場川 | 18 成法寺 | 27 大師山 |
- (番号は集成表番号と対応)

第444図 手焙形土器出土遺跡分布図

れた鉢は、この地域ではこの時期にみられない形態であり、その系譜は他地域に求めなければならない。⁽¹⁰⁾

以上、この段階の手焙形土器は、溝（東山・恩智）、土坑（東山・成法寺）、包含層からの出土であり、東山遺跡の溝に於ては集落を囲む、環濠的な用途を持つものである。また、土坑にみるセット関係は東山遺跡が壺、甕、高杯、器台である。これに対して成法寺遺跡では、高杯、甕のみである。さらに大師山遺跡は包含層中からの出土と、同じ高地に立地する東山遺跡とは、違ったあり方を示している。しかし、これらに共通しているのは、集落の周辺部に出土する傾向にあることである。

第Ⅱ段階（盛行期）

第Ⅰ段階（出現期）

この段階は弥生時代後期後半の時期にあたり、この段階に属するのはA₃・A₄・B₃類である。また、この中でA₃—9の東山遺跡は伴出遺物から第Ⅰ段階でも古い様相を持つ。さらにA₃類は口縁部の形態からA₃（9・10・12・13・14）とA₃'（15・16）とに細分が可能である。また、15の覆部には少なくとも4穴以上の焼成前の穿孔がおこなわれている。この様な例は藤原宮西辺地区で報告されており、注意を引くものである。⁽⁹⁾

A₄—17の上六万寺遺跡例は、体部の高さが短く、覆部の傾斜も手焙形土器中最も急である。なお、A₃—11の手焙形土器は体部上部に刻目突帯と粘土の貼付けを施しているが、口縁部が欠損している為、帰属分類を明確にはできないが、亀井遺跡に於て、頸部に突帯を貼付けた受口状口縁を呈する手焙形土器（14）が出土している。形態的に似かよっており、11はA₃類に属すると考える。

第Ⅰ段階に於ける手焙形土器の鉢部形態は、大旨丸味のある扁平な体部を呈するものが大半を占めるなど、手焙形土器に使用さ

この段階に美園遺跡の手焙形土器が出現するとともに、形態もバラエティーにとむ。しかし、技法的には前段階の影響下にある。その他、A₃がB₃への移行が認められる。形態に於ては、A₂—6の恩智遺跡の球形化した体部を持つ鉢や、B₅—28の突り気味の底部等がある。さらに、B₅—28よりも突り気味の底部を持つものが、亀井遺跡でも出土している。また、B₆の貼付突帯を施さない例もあり、これらの多くは伴出遺物から、古墳時代前期初頭に出現する傾向にある。

この様な中でB₃—25・26は異彩を放つものである。この手焙形土器の分布は近畿地域のみならず、ほぼ全国的に分布する傾向にあるとともに、その地域内での手焙形土器では、古い時期に属するものである等、その動向に注目される。

第Ⅱ段階に於ける出土状態は前段階が集落周辺部からの出土であったが、この段階に於ては、⁽²⁰⁾紅茸山遺跡にみられる墳墓祭祀としての性格が表われる様である。しかしながら、引き続いて集落内での使用もおこなわれる。さらに住居址内での出土例（鷹塚山、郡家川西、紅茸山）が報告されている。これらは地域的には淀川水系に分布する傾向にある。

その他、同形態の手焙形土器が遺跡（美園遺跡と北鳥池、瓜生堂と亀井）を越えてみうけられる他、遺跡内に於ても美園遺跡のごとく他地域の手焙形土器が出土しており、この段階に手焙形土器が盛行している。

第Ⅲ段階（消滅期）

この段階は遺跡数の急激な減少がみられるが、他府県に於ては⁽¹¹⁾今だ盛行しており、この差が単に搬入等による时期的な差であるのか、或いは他の理由によるものかは、現時点では不明である。その他にA₄—21の瓜生堂遺跡例に施文がおこなわれており、この施文構成は美園遺跡や服部遺跡にも同様の例がみられること、または美園遺跡のように装飾壺とのセット関係に重きを置いていることが推察される他、墳墓祭祀にも引き続いて用いられる。このことは、他地域でもみられ、遺跡では弘法山古墳、天王山4号墳、キトラ、三度舞大塚古墳、朝日等である。しかしながら朝日遺跡のごとく、その最初の段階に⁽¹²⁾供献されている例もみられ、地域によって、あり方が違っている。

大阪に於けるこの段階の手焙形土器は、集落内と集落外とに用いられているが、装飾壺の多用とともに、手焙形土器の使用が減少して行く傾向にある。

結び

美園遺跡から出発して、さらに周辺遺跡の手焙形土器について、概観を述べて来た。その結果美園遺跡は手焙形土器の盛行期に出現し、消滅期まで存在し続けた。また、大阪府下では、東山遺跡例から弥生時代後期後半にその上限が求められ、美園遺跡は下限に位置付けられた。

その他、手焙形土器の鉢は突帯が施されたものであることから、その系譜は大阪以外の地域に求められるものであり、この系譜を明らかにするには、滋賀県地域の動向が注目されるが、詳細については、今後の課題とするものである。

今、大阪府下の手焙形土器について振り返るならば、集落内での祭祀から墳墓祭祀へと、手焙形土器の祭祀形態が変化していく傾向にある。また集落では水に関する祭祀行為がおこなわれていたものと推察する。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾ 煤付着や朱が塗られた例等は、その際の祭祀行為の痕跡を示していると考えられるが、小稿ではその復原までには至らなかった。

この復原に於て、出土状態から単に廃棄行為として性格付けるか、或いはたとえ破片であっても、祭祀行為が成された最終的な段階での遺棄行為を示しているかは、明確には決定しがたいが、土器片の移動や土層堆積状況、その他、より精密な調査を蓄積することにより、出土遺物の性格が判明して行くものとする。さらに、美園遺跡の手焙形土器のように、他地域からの搬入品と考えられるものが比較的出土していることから、成形技法、形態分類、胎土分析等をおこなうことにより、地域間での手焙形土器の動きを追求して行かねばならない。

以上、手焙形土器について類推を重ねた概略的なものと成ってしまった、御寛容賜りたい。また、小稿が手焙形土器研究に役立てれば幸いであるとともに、今後は他地域での研究、或いは他の祭祀形態との関係を通じて、畿内社会の姿を明らかにしていくものである。

小稿を草するにあたり、下記の方々には貴重な御示唆を頂き、その御好意に厚く感謝するものであります。

渡辺昌宏、小野久隆、岡本敏行、兼廉保明、大橋信弥、樋口吉文、森村建一、齋藤隆、都築みどり、野口泰子、安達厚三、田中一広、喜多貞裕、南山大学人類学館の方々

(順位不同、敬称略)

- 註(1) 後世の手焙りに似ていることから、その名称が付いたのであるが、用途、性格とも不明である。まれに煤付着や朱が塗布された例が報告されている。
- (2) 工楽善通 1968 「北関東地方」1 『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会 朝倉町教育委員会 1968 「須川遺跡群」
- (3) 江谷寛氏によって、最初の論考がおこなわれた。以降は各遺跡内に於ける様相、或いは資料紹介等の考察である。
- (4) 江谷氏は分布面に於て、大和川水系沿に手焙形土器が出現し、各地域へと波及する。また、鷹塚山遺跡例等から、単独で用いられるのではなく、他の器種とセットとなって用いられたと述べている。近年蔵持黒田遺跡では形態変遷とともに、テラス状遺構出土例から、2個1組で用いられていたと報告されている。
- (5) 小稿の形態分類は蔵持黒田遺跡に拠る所が大きい。
- (6) 他地域産の手焙形土器中、ⅡB₃-26は滋賀県南部地域の手焙形土器に、形態、胎土、調整、施文が似かよっていると、兼廉保明並びに大橋信弥両氏の教示を得た。
- (7) 集落の端は明確には決め難い、まして一時期に於ける集落の端はなお決め難い。この判断は各地区の遺構状態から推察したものである。しかし、美園遺跡の調査は南北の状態は比較的遺構状況が理解されやすいが、東西の状況は推察するのみである。
- (8) 集落の端で水を対象とした例には、長頸壺が認められる。藤田三郎 1982 「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ。

- (9) 受口状口縁を呈する手焙形土器であり、覆部に七孔の穿孔（径4mm）が施されている。
- (10) 手焙形土器の系譜は、鉢に見られる特異な形態から、水口昌也氏（文56）は上箕田遺跡の鉢B（上箕田Ⅳ式）や、安満遺跡の鉢D（方形周溝墓A5-2）に見られる、「受口状口縁をもつ体部の張り出した鉢に求めることができ」と述べられている。また、寺沢薫氏（文67）は体部に突帯を持つ鉢F中の受口状口縁を持つものが、「近江・南山城・北摂の影響下に生まれた鉢」と考えられ、さらに手焙形土器の系譜関係に注目されている。

真田幸成他 1970 『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会。

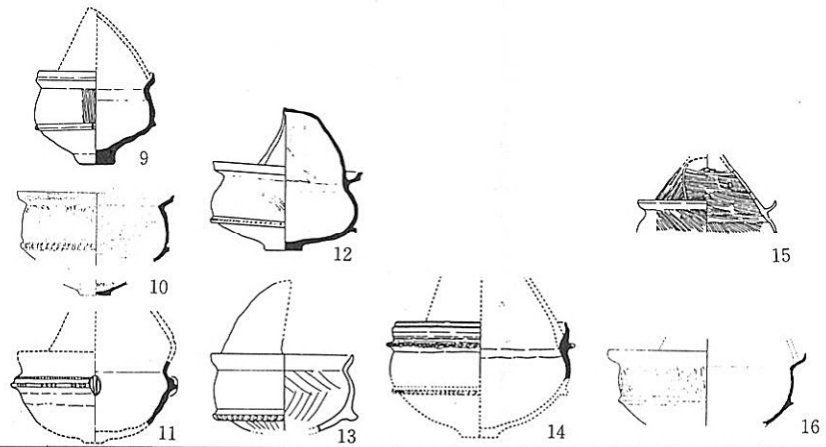
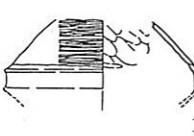
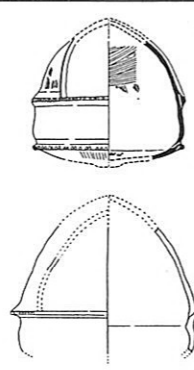
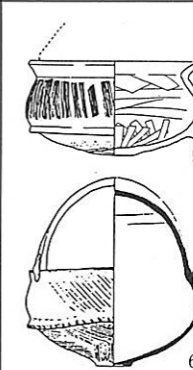
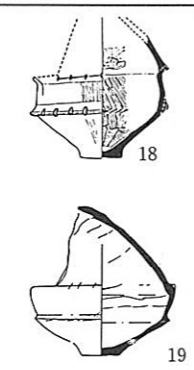
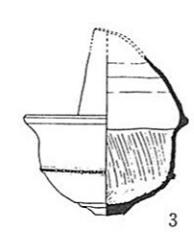
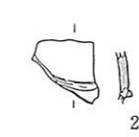
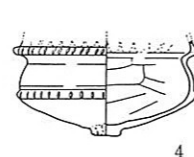
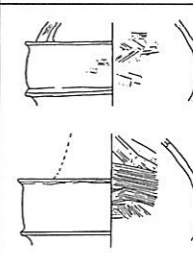
森田克行・橋本久和 1977 『安満遺跡発掘調査報告書一第9地区一』高槻市教育委員会。

- (11) 第32表の様に畿外地域では古墳時代前期前半の時期に集中している。
- (12) 手焙形土器は9点出土しており、弥生時代後期後半では北環濠と方形周溝墓から出土している。次の時期には南環濠と集落内より出土している。
- (13) 環濠からの出土例から、集落の端での溝が日常空間と非日常空間との境界を意味し、その場所に於て、水或いはその他、対称とする祭祀行為がおこなわれていたことも考えられる。
- (14) 焼成時による変化との区別や、洗浄時の剥離或いは鉄分の付着と、肉眼による煤の確認は困難をきわめる。また本来煤が付かない短い時間での使用や、煤の付着しにくいものを使用したことも考えられ、上六万寺遺跡や藤原宮遺跡出土の手焙形土器に注目される。

(番号は参考文献番号と対応)

県	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	備考	県	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	備考
大	1 蔵坂	枚方市藤坂	住居址	後期前半	住居址のピットから高杯と対峙する出土。	愛知	43 矢山	宝飯郡小坂井町	包含層	後期前半	
	2 鷹塚山	枚方市高塚町	包含層	後期前半			44 ジグワジ	知立市知多町	包含層	後期前半	
	3 高槻市高塚町	高槻市高塚町	包含層	後期前半			45 岡島	西尾市岡島町	包含層	後期前半	
	4 紅井山	高槻市紅井町	包含層	後期前半			46 堀田	津島市堀田町	包含層	後期前半	
	5 桂本	高槻市桂本	包含層	後期前半			47 保美具塚	津島市保美町	包含層	後期前半	
	6 郡家川西	高槻市清福寺町	住居址	後期後半			48 十里町	長浜市十里町	包含層	後期後半	文様有。
	7 住内	豊中市市庄内町	包含層	後期後半			49 高田	長浜市高田町	包含層	後期後半	文様有。
	8 北島池	東大阪市若草町	包含層	後期後半			50 五之里	野洲町	包含層	後期後半	高杯、器台、甕と伴出。文様有。
	9 馬場川	東大阪市上六万寺町	包含層	後期後半			51 下藤子	守山市服部町	包含層	後期後半	文様有。
	10 上六万寺	東大阪市上六万寺町	包含層	後期後半			52 服部	守山市横江・大門町	包含層	後期後半	文様有。
	11 鬼塚	東大阪市箱殿町	包含層	後期後半			53 横江・大門	大津市見世	包含層	後期後半	文様有。
阪	12 瓜生	八尾市瓜生	包含層	後期後半		三重	54 滋賀里	津市納所町	包含層	後期後半	
	13 瓜生堂	東大阪市瓜生堂	包含層	後期後半			55 納所	名張市蔵持町	包含層	後期後半	
	14 若江北	東大阪市若江北	包含層	後期後半			56 遊待里田	上野市	包含層	後期後半	
	15 美園	八尾市美園町	包含層	後期後半			57 三田宮之原	四日市	包含層	後期後半	
	16 久宝寺南	八尾市神武町	包含層	後期後半			58 東日野	四日市	包含層	後期後半	
	17 成法寺	八尾市光南町	包含層	後期後半			59 西ヶ丘	京都市山科区	包含層	後期後半	
	18 成法寺	八尾市光南町	包含層	後期後半			60 中臣	向日市物集女町	包含層	後期後半	
	19 船橋	柏原市古町	包含層	後期後半			61 中海道	八幡市	包含層	後期後半	
	20 上田町	堺市上田町	包含層	後期後半			62 天神山	八幡市	包含層	後期後半	
	21 四ツ池	和泉市池上町	包含層	後期後半			63 菅原	天理市布留町	包含層	後期後半	
	22 池上	和泉市池上町	包含層	後期後半		奈良	64 布留	磯城郡田原本町	包含層	後期後半	
千	23 古池北	泉大津市豊中	包含層	後期後半			65 大福	磯城郡田原本町	包含層	後期後半	文様有。
	24 豊中・古池	泉大津市豊中	包含層	後期後半			66 唐古・鍵	奈良市六条町	包含層	後期後半	甕、甕、高杯と伴出。
	25 七ノ坪	泉大津市北豊中町	包含層	後期後半			67 六条山	奈良市六条町	包含層	後期後半	
	26 東山	河内長野市三日月町	包含層	後期後半			68 榎原	橿原市敬信町	包含層	後期後半	
	27 大船山	河内長野市三日月町	包含層	後期後半			69 榎向	橿原市敬信町	包含層	後期後半	
	28 東寺山石神	千歳市東寺山町	包含層	後期後半			70 キトラ	宇陀郡藤原町	包含層	後期後半	文様有。
	29 市	高槻市並校町	包含層	後期後半			71 藤原宮	橿原市	包含層	後期後半	高杯、甕、高杯と伴出。
	30 弘法山	松本市出川	包含層	後期後半			72 田能	尼崎市田能	包含層	後期後半	
	31 大塚洞窟	米見市	包含層	後期後半			73 天王山4号墳	神戸市垂水区	包含層	後期後半	
富	32 杉谷内床ノ山	小矢部市	包含層	後期後半		和歌山	74 笹ノ瀬	海草郡美里町	包含層	後期後半	
	33 魚野	滑川市	包含層	後期後半			75 新屋敷	倉敷市	包含層	後期後半	
	34 串田新	射水郡大門町	包含層	後期後半			76 津寺	吉備郡高松町	包含層	後期後半	
	35 須・王子ヶ池	駿東郡小山町	包含層	後期後半			77 大浦	鳥取市大浦	包含層	後期後半	
	36 祝田	引佐郡江町	包含層	後期後半			78 秋里	鳥取市秋里	包含層	後期後半	
	37 矢崎	西春日井郡清洲町	包含層	後期後半			79 三度舞大塚	倉吉市	包含層	後期後半	
	38 朝日	名古屋市瑞穂区	包含層	後期後半			80 長瀬高浜	東伯郡羽合町	包含層	後期後半	
	39 高蔵	名古屋市瑞穂区	包含層	後期後半			81 御領	深安郡神辺町	包含層	後期後半	
	40 高蔵	名古屋市瑞穂区	包含層	後期後半			82 須川	朝倉町	包含層	後期後半	
	41 見崎台	名古屋市南区	包含層	後期後半			83 西新町	福岡市早良区	包含層	後期後半	
	42 瓜郷	豊橋市瓜郷町	包含層	後期後半							

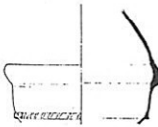
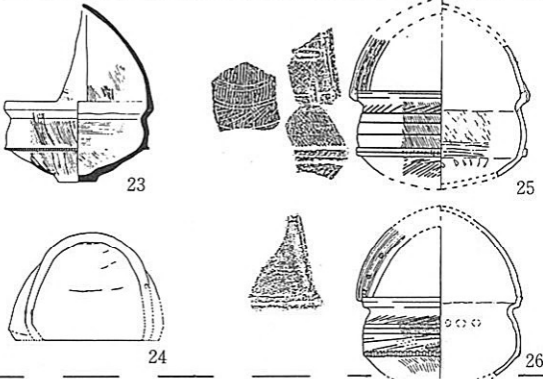
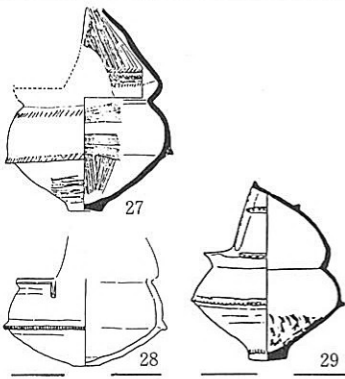
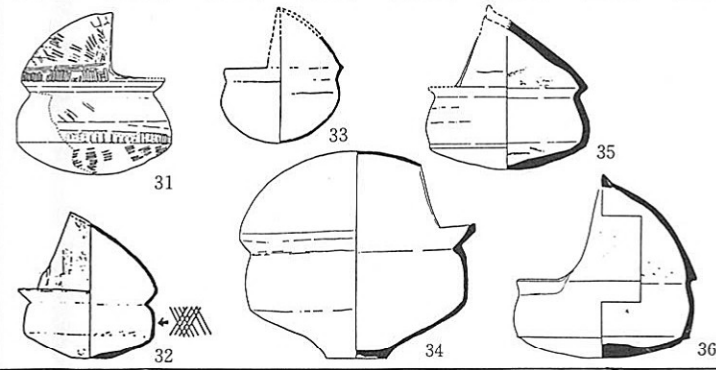
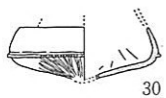
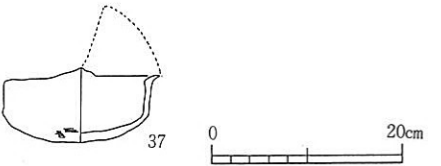
第32表 手形土器集成表

分類 段階	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄
I				
II				
				
III				

土器出土遺跡名一覧表
北島池 (1)
美園 (2, 7, 8, 20)
船橋 (3)
成法寺 (4, 5, 13)
恩智 (6, 12)
東山 (9, 11)
大師山 (10, 16)
亀井 (14, 18)
上六万寺 (15, 17)
瓜生堂 (19, 21)

0 20cm

第445図 手焙形土器形態分類図

	B ₃	B ₅	B ₆
I	 22		
II	 23 24 25 26	 27 28 29	 31 32 33 34 35 36
III		 30	 37 0 20cm

土器出土遺跡名一覧表
 東山 (22)
 成法寺 (23)
 美園
 (24, 25, 26, 30, 37)
 亀井 (27)
 古池北 (28)
 恩智 (29)
 古池・豊中 (31)
 上田町 (32)
 庄内 (33)
 鷹塚山 (34)
 瓜生堂 (35, 36)

第446図 手焙形土器形態分類図

第33表 参考文献一覧

- ① 瀬川芳則 1978 『弥生時代と農耕』『大阪府史』第1巻 大阪府
- ② 鷹塚山遺跡発掘調査団 1968 『鷹塚山弥生遺跡調査報告書』
- ③ 森田克行、橋本久和 1977 『安瀾遺跡発掘調査報告書—第9地区—』高槻市教育委員会
- ④ 原口正三 1973 『紅葎山遺跡』『高槻市史』第6巻 高槻市役所
- ⑤ 柱本遺跡調査会 1972 『高槻市柱本遺跡試掘調査報告書』
- ⑥ 田代克己、堀江門也 1972 『鶴上郡街跡発掘調査報告書—II—』大阪府教育委員会
- ⑦ 田中 琢 1965 『布留式以前』『考古学研究』12—2
- ⑧ 大阪府立花園高校地歴部 1970 『河内古代遺跡の研究』
- ⑨ 下村晴文、福永信雄 1977 『馬場川遺跡発掘調査報告書』東大阪市遺跡保護調査会
- ⑩ 東大阪市教育委員会 1978 『鬼塚遺跡発掘調査報告書 I』
- ⑪ 勝田邦夫 1981 『馬場川遺跡、土六万寺遺跡、山畑66号墳発掘調査報告書』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報22 東大阪市教育委員会
- ⑫ 佐原 真 1968 『畿内地方』『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会
- ⑬ 瓜生堂遺跡調査会 1980 『恩智遺跡』
- ⑭ 中西靖人他 1980 『瓜生堂』大阪文化財センター
- ⑮ 奥 和之他 1983 『若江北』大阪文化財センター
- ⑯ 渡辺昌宏他 1985 『美園』大阪文化財センター
- ⑰ 現地説明会時に実見
- ⑱ 大阪文化財センター 1980 『亀井・城山』石神 怡 1971 『八尾市亀井遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会
- ⑲ 八尾市教育委員会 1983 『成法寺遺跡』
- ⑳ 田辺昭三他 1963 『船橋』II 平安学園考古学クラブ
- ㉑ 原口正三 1968 『大阪府松原市上田町遺跡の調査』『大阪府立島上高校研究紀要』復刊第3号
- ㉒ 樋口吉文、森村建一両氏の教示
- ㉓ 第二阪和国道内遺跡調査会 1970 『池上・四ツ池遺跡』10・11号
- ㉔ 石神 怡、鈴木陽一 1978 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会
- ㉕ 豊中・古池遺跡調査会 1976 『豊中・古池遺跡発掘調査報告書』そのIII
- ㉖ 泉大津市教育委員会 1982 『ヒノ坪遺跡発掘調査報告書 II』泉大津文化財調査報告書7
- ㉗ 大阪府教育委員会 1980 『東山遺跡』大阪文化財センター
- ㉘ 関西大学 1977 『河内長野大師山』
- ㉙ 沼沢豊、深沢克友他 1977 『東寺山石神遺跡』千葉文化財センター
- ㉚ 工藤善通 1968 『北関東地方』I 『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会
- ㉛ 斎藤忠雄 1978 『弘法山古墳』松本市教育委員会
- ㉜ 小栗忠彦 1968 『富山県永見市大境洞窟出土の土師式土器』『考古学集刊』4—2
- ㉝ 小矢部市教育委員会 1982 『杉谷内床ノ山遺跡発掘調査現地説明会資料』
- ㉞ 参照
- ㉟ 橋本 正、神保孝造 1973 『市田新遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- ㊱ 大塚初重 1968 『東海地方』II 『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会
- ㊲ 静岡県教育委員会 1968 『静岡県文化財調査報告書』第8集
- ㊳ 参照
- ㊴ 愛知県教育委員会編 1982 『朝日遺跡 I』
- ㊵ 杉原莊介他 1968 『伊勢湾地方』『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会
- ㊶ 参照
- ㊷ 名古屋市教育委員会 1968 『見晴台遺跡Ⅳ・Ⅴ次発掘調査報告書』
- ㊸ 和島誠一他 1963 『瓜郷』豊橋市教育委員会
- ㊹ 参照
- ㊺ 知立市 1976 『知立市』上巻
- ㊻ 西尾市 1973 『西尾市史』I
- ㊼ 津島市史編さん委員会 1968 『埋田遺跡発掘調査報告書』
- ㊽ 紅村 弘 1959 『東海の先史遺跡—三河編—』
- ㊾ 長浜市教育委員会 1977 『宮司遺跡、十里町遺跡調査報告書』
- ㊿ 林 博通 1981 『滋賀県における弥生式土器に施された絵画、記号の図形』『考古学雑誌』67—1 日本考古学会
- ① 滋賀県教育委員会 1978 『滋賀県文化財調査年報』
- ② 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1977 『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ—II—』
- ③ 大橋信弥氏教示
- ④ 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1978 『湖南中部流域下水道管理道路関連遺跡発掘調査報告書』I
- ⑤ 田辺昭三他 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- ⑥ 三重県教育委員会 1980 『納所遺跡』
- ⑦ 名張市教育委員会 1978 『蔵持黒田遺跡』
- ⑧ 宇佐智一、森川俊男 1961 『伊賀に於ける弥生式土器・土器集成』『伊賀郷土史研究』5
- ⑨ 四日市教育委員会 1966 『四日市埋蔵文化財調査報告書』第1集
- ⑩ 三重県文化財連盟 1970 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告書』
- ⑪ 京都市文化観光局文化財保護課 1974 『中臣遺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974—III
- ⑫ (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977 『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1977—I
- ⑬ 高橋美久二 1979 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集 向日市教育委員会、長岡京跡発掘調査研究所
- ⑭ 江谷 寛 1971 『手塚形土器の再検討』『古代学研究』を参照
- ⑮ 参照
- ⑯ 参照
- ⑰ 奈良県立橿原考古学研究所編 1978 『大福遺跡』
- ⑱ 藤田三郎 1983 『唐古・鍵』田原本町教育委員会
- ⑲ 久野邦雄、寺沢薫 1980 『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- ⑳ 奈良県教育委員会 1961 『橿原』
- ㉑ 橿原考古学研究所編 1976 『橿原』
- ㉒ 前園実知雄、伊藤勇輔 1974 『奈良県橿原町の古墳時代初期の墳墓』『古代学研究』71
- ㉓ 奈良国立文化財研究所 1980 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』II
- ㉔ 兵庫県社会文化協会 1967 『田能遺跡調査報告書』
- ㉕ 神戸市教育委員会 1980 『神戸市垂水区伊川谷町天王山古墳群第4号現地説明資料』
- ㉖ 泉史編さん室 『和歌山県史』
- ㉗ 真壁忠彦 1958 『倉敷市酒津及び新屋敷遺跡出土の土器』『瀬戸内考古学』第2号
- ㉘ 鎌木義昌 1968 『山陽地方』II 『弥生式土器集成』本編1 日本考古学協会
- ㉙ 鳥取市教育委員会 1978 『大桶遺跡・I』鳥取市教育委員会 1983 『大桶遺跡・II』
- ㉚ 鳥取市教育委員会 1976 『鳥取・秋里遺跡 I』鳥取市文化財調査報告書IV
- ㉛ 梅原未治 『岡伯二国における古墳の調査』『鳥取県史蹟地調査報告書』第2集
- ㉜ 中郡埋蔵文化財調査事務所 1981 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書III』鳥取県教育文化財調査報告書8 (財)鳥取県教育文化財団
- ㉝ 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財センター 1981 『神辺御領遺跡』
- ㉞ 朝倉町教育委員会 1968 『須川遺跡群』
- ㉟ 折尾 学、常松幹雄他 1982 『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集